

ます。その後、アブキールに上陸したオスマン軍を撃退するものの戦局は好転せず、1799年8月にナポレオンは幕僚に指揮を任せ、劣勢を認めることなく帰国してしまいました。これについては対仏同盟の宣戦を知ったための帰国とされていますが、後の歴史書や研究書には多くの批判があります。

その後、2年の時を経た1801年9月、最後まで残されていたアレクサンドリアのフランス軍はイギリス軍と和平を結び、遠征は失敗に終わることになります。約180名ともいわれる学術調査団は、遠征当初より動物や植物、人々の風俗、さらにはピラミッドや大神殿の古代遺物などを綿密に記録していました。ところが、この敗北によって成果の大半をイギリス軍に接収されます。しかし、研究者からイギリス軍への談判で認められたものは、後に述べるロゼッタ・ストーンの本体を除き、私有物として、或いは複製や模造を作るなどしてフランス側も重要な業績を持ち帰ることになります。<sup>(2)</sup>

### ■皇帝となり『エジプト誌』の刊行を命じる

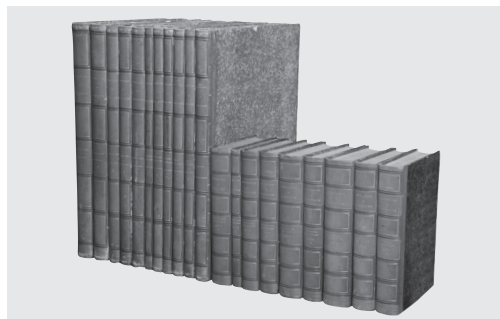
話は少し戻りますが、エジプトに残された部下たちが苦境にある中、フランスに立ち戻ったナポレオンは、その直後の1799年11月にブリュメールのクーデタを敢行して統領政府を樹立し、第一統領となります。続いて1800年からの第2次イタリア戦役で勝利してオーストリアとの間でリュネヴィル条約を、またイギリスとは1802年の3月にアミアン条約を締結して、対英戦争の一環であったエジプトでの戦いも正式に終結しました。そして、1802年8月人民投票によって終身統領となり、1804年5月には元老院の議決によって皇帝の位に就きます。この間、フランス銀行の創設や高等教育機関の整備、第8年憲法、第10年憲法制定、さらには民法典の公布など、国内の治世にも力を注いでいます。

皇帝に就任して約5年後の1809年、この頃は彼が最も権勢を誇っていた時期ですが、先のエジプト遠征における学術研究上の成果が総合的に纏められ、「ナポレオン大帝の勅命により」<sup>(3)</sup>パリの国立印刷所から*Description de l'Égypte* (『エジプト誌』・写真)として刊行され始めました。

標題紙には別名として『フランス軍のエジプト遠征中になされた観察と研究の集成』と記さ

れ、彼が失脚して死去した1年後の1822年まで発行され続けました。

この書物の寸法は、本文は寸法が39.3×25.3センチで、「古代遺物」4巻、「現状」3巻、「博物」2巻の計9巻に分かれています。図版は本文を上回る71.3×53.6センチで、「古代遺物」5巻、「現状」2巻、「博物」3巻、「地図」1巻の計11巻、合計20巻の超大型本になっています。なお、この書物は製本の加減によって全22巻で刊行されたものもあります。



*Description de l'Égypte.*  
Paris, 1809-1822.  
(本学図書館所蔵)

図版はすべて精巧な銅版画で、古代遺物や動物植物などには手彩色刷りもあり、製版印刷の先鋭さと表現の技巧さからは、当時のフランスの印刷技術の水準の高さが伺えます。

この『エジプト誌』は13年をかけて完結しますが、これを契機にしてフランスはもとより世界的にエジプト研究の機運が高まりました。20世紀後半になると、当事国エジプトでの研究体制の確立も相まって、「エジプト学」とよばれる研究分野が形成されてきました。

現在、このような業績に基づいて、ナポレオンを「古代エジプト文明を現代社会へ蘇らせるきっかけを作った功労者」とする見方もあります。ナポレオンも彼の「東方の夢」<sup>(4)</sup>と形容されるほど、エジプト文化へ傾倒していたと思われるのですが、『エジプト誌』の編纂については、あまりにも豪華本であるが故に、軍事的な敗北色を薄め文化面での勝利を強調しようとした意図も伺えるのです。

### ■ロゼッタ・ストーンとヒエログリフ

イギリス軍との和平の締結後、模倣と模写が認められたロゼッタ・ストーン (Rosetta Stone・レプリカ=写真) は、1799年にフラン